

KOKUGO

受賞作品 | 国語部門

〈総評〉

「自分とは異なる立場・状況」や「自分が経験したことのない困難・苦悩」を扱った作品が目立ちました。SNSの発達により海外のニュースや他者の意見に触れる機会が増加したこと、そして今年が「戦後80年」に当たることも背景にあるのでしょう。

印象的だったのは、上記のようなテーマに出会ったときに「共感できない」「関係ない」と切り捨てるのではなく、「何が・どのように違うのか」を丁寧に考えようとする姿勢です。違いを理解して自己理解を深めたり、異なる状況の他者との関わり方を模索したりと、方向性はさまざまですが、考えた軌跡や気持ちの変化・成長がよく伝わってきました。

一方で、その変化や成長を文章にすることに苦戦している作品も少なくありません。難しい作業ですが、ぜひ粘り強く取り組んでください。先生の言葉や教科書の表現を借りるのではなく、自分の言葉で書きあげる挑戦が、来年さらに増えることを期待します。



文部科学大臣賞

木のこころと自然の声

愛媛県 今治市立南中学校 3年
前田 佳汰



子どもの文化・教育研究所 理事長賞

ミニラの取扱説明書

愛知県 愛知教育大学附属岡崎小学校 6年
平山 奈々子



一般社団法人 日本児童文芸家協会 理事長賞

食べるということ

鹿児島県 志布志市立松山中学校 2年
橋口 咲空



中央出版株式会社社長賞

人の悪いくせ

福島県 浅川市立浅川中学校 2年
原 夢乃



優秀賞

人は死んだらどこへ行くのか考えた夏

兵庫県 姫路市立広峰小学校 4年
三和 倫太郎

「アルジャーノンに花束を」を読んで

東京都 東京都立大学等々力中学校 2年
郷坪 晃太

スラムに水は流れない

静岡県 静岡学園中学校 2年
望月 凜人

木のこころと自然の声

前田 佳汰 | 愛媛県 今治市立南中学校 3年



西岡常一『木に学べ』の感想文

〈選考理由〉

佳汰さんは、法隆寺の復元に携わった宮大工の棟梁・西岡常一さんの『木に学べ』を手がかりに、「木」と「建築」の魅力、そして西岡さんの執念に心を動かされた体験を自分の言葉で掘り下げました。書籍という情報から得た知識に佳汰さん独自の感性が重なって、描写が生き生きと立ち上がっている点が本作の大きな魅力です。とりわけ「静かで澄んだ空気」「小雨にけぶる寺院」「きれいに掃き清められた庭」といった言葉が、手触り（澄んだ空気の感触）、温度（森のひんやりした冷たさ）、匂い（ひのきの香り）など、読み手の五感ををくすぐらせます。読んでいると、まるで森の中から建築を見上げているかのような没入感がありました。読書感想文は解説的になりやすい傾向がありますが、佳汰さん自身が五感で感じたことが、丁寧に表現されているからでしょう。

終盤で、西岡さんの棟梁としての「木の癖を見抜き、生かす」という思想から「社会での人の関わり方」へ視線を広げる展開も見事です。「木の癖が組み合わさって強く美しい塔をつくるように、自分も社会の一部として力を尽くしたい」という結びからは、この読書体験が、佳汰さん自身の生き方や社会へのかかわり方を大きく変えたことが伝わります。これからも様々な建築や芸術に触れ、目と手と鼻で確かめたことを、自分の言葉で丁寧に組み上げていってください。（『木に学べ』西岡常一 著 小学館）

ミニラの取扱説明書

平山 奈々子 | 愛知県 愛知教育大学附属岡崎小学校 6年



〈選考理由〉

「弟・ミニラの取扱説明書」という題名の付け方と発想がユニークでユーモラス。読み手を一気に内容へ引きこみます。説明書という表現の効果からか、ミニラの性格や特技、特徴の説明で情景が次々と思い起こされ、奈々子さんとミニラのにぎやかな日常が感じられました。文章はシンプルでリズムカル。奈々子さんの弟への眼ざしが生き生きと伝わります。ミニラへのにくたらしさと愛おしさが同居する感情の揺れも、飾らない言葉づかいで素直に伝わり、読み手も思わず笑みがこぼれてしまいます。

一方、後半の「ミニラが泣いてしまった」というエピソードで空気ががらりと変わります。「ミニラをいじめる人はきらいだ」「傷つけないで、話しかけないで、泣かさないで」という言葉は、前半でミニラを大好きになっている読み手の胸にまっすぐ届き、奈々子さんの悲しさと悔しさと強く共鳴します。

奈々子さんからミニラの友人へ発される「いつも仲良くしてくれてありがとう」は、ミニラを守る盾であると同時に、周囲への静かな合図でもあるのでしょうか。「説明書」という形式を超えて、ミニラを取り巻く社会に向けたメッセージへ変わった瞬間でした。ユニークで力強く、深い愛情に満ちた作品です。どうかその眼ざしと言葉で、自分なりの「取扱説明書」を更新し続けてください。

食べるということ

橋口 咲空 | 鹿児島県 志布志市立松山中学校 2年

No.

を、題目は「野三郎の死ぬのマス」を「食」にしよう。
 文庫は「行めから」一本だけで書きはじめよう。
 文庫の構想をすっかり定めてから書き始めよう。

各段落のはじめはなから「書き始めて書きはじめ」「つぎ段落をおつたつた行をきましよう」

（ ） 月 日 曜日

食 べ る と い う こ と

志布志市立松山中学校 二年 橋口 咲空

今日の夕食はタコライスだ。「タコス」は

メキシコの料理であり、日本人の誰かがお米

の上にタコスの具を載せてみたら、おいしか

ったのだらう。だから「タコライス」。元々

外国生まれの料理を日本でも食べられること

は素晴らしいことだと思う。

夕食作りの担当は「父だ」たり母だ「たり

する」食堂を経営している父の作る唐揚げは

中学校

最高においしい。父の作る唐揚げ「アニカ多

いのも納得する。

タコライスを一口食べてみる。少しピリッ

としたひき肉とチーズのハーモニイは、私を

幸せな気分にさせた。シヤキシヤキタス

とすっぱいトマトは、「明日も頑張ろう。」と

いう気持ちにさせた。

食へ進める中、テレビはパレスチナがザ

地区の人々に関するニュースを伝え始めた。

人口の半数が飢餓の危機にあるというのだ。

（中略）

食、読みやすいように、「と」を「し」につけよう。「と」とは、それぞれ「時」にかかえて、マスのなかの右の字に「に」を「ま」よう。
 「食」を「し」につけよう。「と」とは、それぞれ「時」にかかえて、マスのなかの右の字に「に」を「ま」よう。
 「食」を「し」につけよう。「と」とは、それぞれ「時」にかかえて、マスのなかの右の字に「に」を「ま」よう。
 「食」を「し」につけよう。「と」とは、それぞれ「時」にかかえて、マスのなかの右の字に「に」を「ま」よう。

50 x 70

東京島根中学校教育研究会公認誌用紙

〈選考理由〉

パレスチナ・ガザ地区で戦闘が始まって、今年で3年目を迎えます。大好きな夕食の時間にガザの飢餓問題のニュースを目にした咲空さんは、自分にできることを探そうと「食品ロス」について考えました。

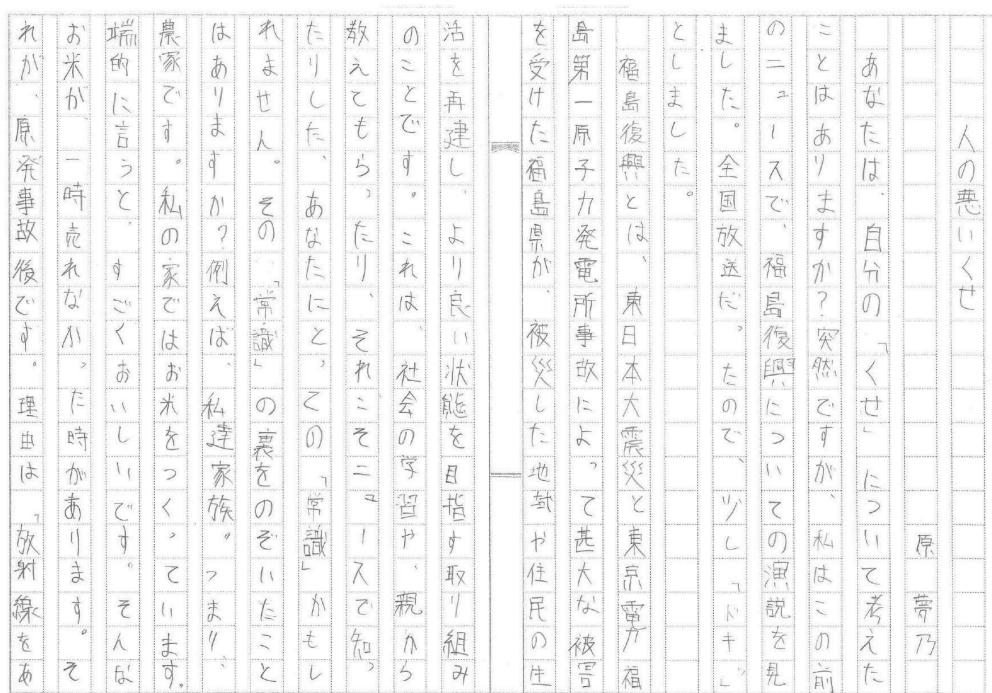
冒頭では、ありふれた温かな日本の食卓から、一転して、少ない食糧を分け合うガザの人々の様子が語られます。匂いや味覚まで感じられる何気ない日常と、画面越しに届く非日常の対比が非常に効果的で、「私が食べることを楽しみ、幸せになっているときに、食料を手に入れられない人々がいる」という言葉に込められた悲しい衝撃がいつそう際立ちます。

「お金を払ったのだから、食べ物をどうしようが自分の勝手だ」という、予則される常識的な一つの見方（反論）にも正面から向き合い、「多くの人や自然に『食べさせてもらっている』ことを忘れてはいけない」と主張する姿勢からは、「なぜ食品ロスは減らないのか」という問いを多方面から掘り下げた跡が見えました。予測される反論や常識的な見方→考察→主張という論の運びが筋道だっていて、咲空さんの考えに強い説得力を持たせています。

一つのテーマを自分事として経験に結び付け、自分の言葉で考えを示すその姿勢は、これからの社会を生きるうえでの大きな強みになるでしょう。

人の悪いくせ

原 夢乃 | 福島県 浅川市立浅川中学校 2年



〈選考理由〉

「令和の米騒動」と呼ばれるほど、お米に悩まされた2025年。これまで当たり前食卓に並んでいたお米の貴重さ・大切さを、改めて実感した方も多いでしょう。福島の米農家の家で育った夢乃さんは、震災後に地元の米農家が置かれてきた厳しい現実に関心をもち、今年、多くの人々が米を買い求める光景を目の当たりにし、「人の悪いくせ（状況に流されやすい心理や、多数派意見を“常識”として信じ込む傾向）」について考えを深めます。

米不足の大きな要因の一つを「米農家の減少」にあると捉えた洞察は的確で、「後先のことを考えず、周りの『あたりまえ』にとらわれて、けっきょく自分が苦労しています。」という一文には、つらい現実に向き合った米農家への思いと、日々の現場を知る者ならではの鋭さが宿っています。読み手は、その言葉の痛みと重みを通じて、自分たちの消費行動や“常識”を問い直すにはいられません。当事者の視点から丁寧に経験をえがき、社会と人々の当たり前への問いを力強く投げかける作品です。

“常識”や空気に左右されない思考の筋力こそ、夢乃さんの強みです。これからも自分の頭で考え、見出した事実と実感を世に届けてください。